

「蛙の求婚」をめぐる

桜井雅人

一 ナースリー・ライムとバラッド

口承文芸の研究においてジャンルの分類は重要であるとされてきた。ジャンルの相違は文芸意識や伝承過程にも深い関わりがあるものと推測されるし、実際的な問題としては資料の収集・分類を行うために必要となるからである。しかし、ジャンルの規定について明確な原理が示されているのではない。消極的に言うならば、「作品」の内的要因のみでジャンルを決めることはきわめて困難である。そもそも口承文芸という概念が非常に新しいものである。そして、それぞれ独自に定義されたジャンルをまとめるためのアンブレラ・ワードとして利用されてきたことが多し。それゆえジャンル相互の境界や関係はかなり

あいまいなままにされている。

このようなことは、専門の研究者の間でもあまり大きな問題にはならなかった。なぜならば、多くの研究者は特定のジャンルの専門家であって、口承文芸全体を論じることがまれであるからである。バラッド研究者はチャイルド・バラッド以外にはほとんど言及しないし、ナースリー・ライム研究者はバラッドを避けているようである。しかし、このような研究上の伝統は、はたして口承文芸そのものに由来しているのであろうか。

もちろん様々なジャンルの伝承者は、それぞれ別個であるはずはないし、同一ないしは同一集団の成員であることが多いだろう。特定のナースリー・ライムの伝承者と特定のバラッドの伝承者が同一である場合、伝承者の

中でそれらを区別しているのかどうか問題とされる。しかし、最終的な判断は客観的な基準で行われるべきである。

バラッドとナースリー・ライムにおいては、いずれも韻文伝承であるという共通点を除くと、一方では文芸上のスタイルと物語性という要素によって、もう一方は子供を対象としているという機能によって区分されてきた。一見すると相互に排他的なジャンルとして扱われながら、実質的には境界線は明確でない。それゆえ、物語性のあるナースリー・ライムをバラッドと呼ぶことも行われている。たとえば、オービー夫妻編『オックスフォード版ナースリー・ライム集』⁽¹⁾において、最後の章は「バラッドとソング」と題されて、物語性のあるナースリー・ライムが収められている。バラッド研究者の立場からすると、これらをナースリー・ライムだからバラッドから除くというのは、適切なことではないであろう。もしかすると「ナースリー・バラッド」⁽²⁾とでもいう分類項目が考えられるかもしれない。たとえ中心的な対象とはされなくとも、関連あるものとして扱う必要がある。

二 「蛙の求婚」の系譜

物語性のあるナースリー・ライムは、「物語性」の定義如何で多いとも言えるし少ないとも言えるが、きわめて物語性が強く結末がはっきりと示されているバラッド的なものとなると、それほど多いとは言えない。しかし、チャイルド・バラッドとみなされているものでも、版によってあまり「物語性」を残していないものもあるので、「物語性」のみにこだわるとバラッドの本質を誤って理解することになるかもしれない。ともかくも、バラッドとナースリー・ライムの境界にあるものとしてしばしば言及されているは「蛙の求婚」⁽³⁾ (A Frog He Would a-Wooing Go) である。「今日ではイングリランドやアメリカの民謡集でこの歌の伝承版を収録していないものはない」⁽⁴⁾とは言いすぎであろうが、時代的にも地域的にも長く広く伝えられてきたものである。はじめに、その系譜をみておこう。

この歌がいつ作られたのかは断定できないが、記録からすると十六世紀以降ということになる。一五四九年の『スコットランドの哀歌』(The Complaynt of Scotland)

において、羊飼いが歌う「甘く旋律的な歌」の一つとしてあげられている「蛙が水車小屋の戸口にやってきた」(The frog cam to the myl dur)がもっとも古い記録とみなすことが一般的ではあるが、「蛙の求婚」と同じ歌であるという確証は得られてはいない。その次の記録は、一五八〇年一月二日付でロンドンの書籍出版業組合 (Stationers' Company) に登録された「蛙とネズミのすこぶる奇妙な結婚」(A Moste Strange Weddinge of the frogge and the Mouse) という小唄 (ballad) で、版權登録者はエドワード・ホワイト (Edward White) となっている。この歌が「蛙の結婚」であることはほぼ確実であるが、ホワイトが作者である可能性はきわめて薄い。おそらくは、当時の他の版權登録と同じように、流行歌謡を自分のものと称しただけであろう。

テキストそのものとしては、一六一一年に出版されたトマス・レイブンズクロフト編『メリスマタ』(Thomas Ravenscroft, *Meismata*) に収録された「蛙とネズミの結婚」(The Marriage of the Frogge and the Mouse) がある。他の三曲とともに「田舎のなぐさみ」という題目の下に並べられているものであり、四声の曲に編曲さ

れている。『メリスマタ』は「音楽的幻想——宮廷・都會・田舎の気分に合わせて」との副題を持つ歌集で、もちょうん子供向けのものではない。また、有名なバラッド「三羽のカラス」(The Three Ravens) の次に並べられていることにも注目しておきたい。

さて、その内容であるが、結論を先に言ってしまうと、物語としては現在まで伝わる版と大筋において同じである。全部で十三連から成る物語歌であり、出来事の描写と対話のみによって話が進行して行くという点においては他のバラッドと同じ語り口である。はじめの三連は

1 It was the Frogge in the well,

Humble-dum, humble-dum.

And the merrie Mouse in the Mill,

tweedle, tweedle twino.

2 The Frogge would a wooing ride,

Sword and buckler by his side.

3 When he was ypon his high horse set,

His boots they shone as blacke as iet.

となっている。井戸の中に蛙が、水車小屋にネズミが住んでおり、蛙は刀と盾をたずさえて嫁さがしに出かける。

立派な馬にまたがって、靴は黒光りしている。まさに、中世の騎士の出で立ちで「宮廷恋愛」めいた物語となっている。相手の「レイディー・マウス」に結婚を申し込み、主人のドブネズミに式をとり持ってもらうのだが、そこへ猫と雄鴨がやってきて、三匹はちりぢりに別れてしまう。イーブリン・ケンドリック・ウエルズは、この歌が当時の宮廷人を諷刺したものであることを示唆しているが、『メリスマタ』自体は諷刺の歌を集めたものではないし、単なる「なぐさみ」として扱われている。なお、バーデン (Baden) について、紡ぎ車の音を表わすという解釈があるが、それほど深い意味はなく単なる「合の手」であろう。

ウォルター・スコット所蔵のマニエスクリプトは一六三〇年頃のものだとされ、全体がスコットランド英語で書かれているが、かなり細部に至るまで『メリスマタ』版によく似ている。おそらくは『メリスマタ』そのものによって伝えられたあと採録されたものでほとんど口頭伝承という過程をとっていないものと思われる。しかし、この歌は十八世紀にはあちこち歌われたらしく、トマス・ウォートン (Thomas Warton) によると一七八一

年には「子供の歌」となっていたようであるし、ジョン・ピンカートン (John Pinkerton) は一七八三年にエディンバラの舞台で歌われたと書いている⁽¹⁴⁾。

現在の多くのマザーグース集に採用され、オービー夫妻によると「もともと有名で、かつもともと最近の」版は、『ナースリー・ライム辞典』にも載っている「恋に悩む蛙」(The Love-sick Frog) である。「もともと最近の」というのには問題があるが、少なくとも英国のマザーグース集においては「もともと有名」である。題名は冒頭の歌詞をとって「蛙が嫁がしにかけた」(A Frog He Would a Wooing Go) とするものも多いが、もともとは一八一五年頃のシュージック・シートにあるもので「恋に悩む蛙、別名ヘイ・ホーとローリーが言う。コメント・ガーデン劇場でリストン氏によって歌われたもので、我が祖母によるハーブまたはピアノのための伴奏付き」(The Love Sick Frog, or Heigh ho said Rowly. Sung by Mr. Liston, at Covent Garden Theatre with an Accompan^t for the Harp or Piano Forte. By My Grandmother) と書かれている。ここからわかるように、客間用バラッド (drawing-room ballad) として出た

れたものであり、ミュージック・ホル的な歌謡であった。この版は「おそらくはじめはグリマルディが、そのあと十九世紀のはじめにロメディアンのジョン・リストンが流行させた」⁽¹⁷⁾ものである。グリマルディ (Joe Grimaldi) はバントマイムの芸人であり一八〇六年にロセント・ガーデンで『マザー・グース』(Mother Goose) を演じて有名になったのであるが、これは子供ではなく大人の観客を対象にしていた⁽¹⁸⁾。それゆえ、このリストン版はビクトリア朝のばか騒ぎ (horseplay) につながる伝統にあり、その意味においては、民俗的歌謡を大衆的歌謡に作り変えたものであった⁽¹⁹⁾。なお、一八六〇年頃アメリカのポストンで出版されたミュージック・シートには、⁽²⁰⁾「ジョン・スミスという人」(one John Smith) の作詞作曲になると書かれているが、明らかにリストン版であり「ジョン・スミス」は出版社が新しい曲であることを示すために利用した名にすぎない。ただし、このリストン版は、あとで検討するように、アメリカではほとんど受け入れられなかった⁽²¹⁾。

リストン版は全部で十四連から成る⁽²²⁾。

1. A frog he would a-woolng go,

Heigh ho! says Rowley,

A frog he would a-woolng go,

Whether his mother would let him or no.

With a rowley, powley, gammon and spinach,

Heigh ho! says Anthony Rowley.

2. So off he set with his opera hat,

And on the road he met with a rat.

3. Pray, Mister Rat, will you go with me,

Kind Mrs. Mousey for to see?

と話は続く。すっかりめかし込んで、オペラ・ハットをかぶった蛙は、途中でドブネズミ氏に出合う。いっしょにハツカネズミ夫人の家に行くと、夫人は糸を紡いでいた。三匹はビールを飲んだり歌ったりして騒いでいるところへ、猫が子猫を連れて飛びこんでくる。ネズミたちは猫にやられてしまい、蛙はほうほうの態でそこから逃げ出す。帰りすがら小川を渡ると、アヒルが出てきて、蛙を一飲み。そこで三匹のお話はおしまい、となる。蛙の服装からすると、ロセント・ガーデンへ出かける観劇

客のようでもあり、舞台の上の芸人のようでもある。歌ではオペラ・ハットしか言及されていないが、多くの絵本⁽²³⁾ではそのように描かれている。しかし、求婚に出かけた相手が「夫人」(Mistress)であるのはなぜだろうか。そもそも、その夫人に「求婚」したのだろうか。ドブネ

ミズ氏とハツカネズミ夫人との関係もわからない。この歌がもととエンターテインメントを目的にしているのなら、このような問題点もあまり気にならないし、むしろ矛盾をそのまま受け入れて伝えられていくこともあることに注目しておこう。また、バーデンに特徴があることにもふれておかなくてはならない。もともとバーデンに文字どおりの意味はないはずであるが、アントニー・ローリーがチャールズ二世であるという説が時折り聞かれる。オービー夫妻はそれは「ありえないように思われる」⁽²⁴⁾と言う。

もう一つ有名な版に、『ガートンおばあさんの詩歌集』(Gammer Gurton's Garland, 1784)に紹介され、その後ジェームズ・オーチャード・ハリウエルの『イングリッシュのナースリー・ライム集』(The Nursery Rhymes of England, 1842)に再録されたものがある。『ガートンお

ばあさんの詩歌集』は副題に「子供の詩集」(the Nursery Parnassus)とあるもので、「読むことも走ることもできないすべての小さなよい子たちを楽しませるためのかわいらしい歌と詩の選集」という説明が加えられている。のちに増補版(一八一〇年)が出たが、前半はジョーゼフ・リトソン (Joseph Ritson) の編になるものである。ただし、説明にあるとおり、大人が子供に読んで聞かせるために作られたもので、のちの「マザー・グース集」とはちがってさし絵もついていない大人用の本である。ハリウエルの本は「一〇〇年以上にわたってナースリー・ライム集の基礎」⁽²⁵⁾となったものであるだけに、影響は強かったはずであるが、「蛙の求婚」に関してはリトソン版のほうが有名である。ハリウエル版は九連あり、

1. There was a frog lived in a well,

Kitty alone, Kitty alone;

There was a frog lived in a well,

Kitty alone, and I!

There was a frog lived in a well,

And a farce mouse in a mill,

Cock me carry, Kitty alone,

Kitty alone, and I.

2. This frog he would a woing ride,

Kitty alone, &c.

This frog he would a woing ride,

And on a snail he got astride,

Cock me carry, &c.

と始まる。内容は『メリスマタ』版に似ているが、結末はリストン版と同じである。井戸に蛙が、水車小屋にハツカネズミが住んでいて、蛙はカタツムリに乗って嫁さがしに出かける。ネズミの邸宅にやってきて戸をたたいて言う。「私を好いてくれるかどうかを知るためにやってきた。」ハツカネズミは「ドブネズミ伯父さんが帰るまで御返事はできません。」と答える。「留守の間にだれがやってきたのか。」と伯父さんが聞くと、「立派な紳士がおみえになりました。」と言う。蛙が口笛を吹きながら小川を渡る時に、アヒルと出合い、アヒルは蛙を一飲みにしてしまう。内容からみると、前の二版よりもまともまりがあるのだが、それに反しておもしろ味が少ない。

ハツカネズミはここでは未婚となっているし、伯父さんネズミが父親がわりをしている。きちんと結婚の申し込みをしており、ハツカネズミ嬢も乗り気のようなのである。その様子を見て取ったからこそ蛙は口笛を吹きながらひとまず帰宅の途についたのであろう。意外性があるのは、カタツムリを馬がわりにしているところであり、全体的にみて「小さなよい子たち」を対象としているだけのことはある。

イギリスのナイスリー・ライム集に掲載されている「蛙の求婚」は、多くはリストン版であり、一部でハリウエル版⁽²⁸⁾がある。子供向けの歌集をみると載っているものが少ない⁽²⁹⁾。この点においても、アメリカ版(後述)と大きな違いがある。すでに見てきたように、「蛙の求婚」はもともと子供の歌ではなかった。子供が作ったものではないし、元来は子供向けのものでもなかった。また、はじめからマザー・グース集に含まれていたのではない。有名なジョン・ニューベリーの『マザー・グースのメロデー』⁽³⁰⁾にはなく、一九世紀になってあとから仲間入りしたのである。しかし、遅くとも十九世紀後半には他のライムと同様の扱いを受けていたようである。オービー

夫妻の書誌⁽³¹⁾によると、一八六〇年から一九〇〇年に至るまで七種の独立した絵本が出版されており、ランドルフ・コールデコットもその絵本シリーズの一冊(一八八三)を描いている⁽³²⁾。現在の「マザー・グース」としての「蛙の求婚」は、ほぼこの時期に姿が定まったと言えよう。つまり、読んで聞かせるためのナースリー・ライムは、起源からみると伝承的であるが、純粋な伝承童謡(わらべ唄)とは言い難いのである。

三 イギリスの伝承版

イギリスにおいて「蛙の求婚」がまったく伝承されなくなつたのではない。一般にはそれほど知られていないと言えないが、それでも今日に至るまで伝承版は報告されているし、レコードになつてゐる資料もある。しかし、「蛙の求婚」はナースリー・ライム集によつて知ることがふつうであり、ジェームズ・リーブズが「いまだにアメリカでは口頭伝承によつて広まつている」⁽³³⁾(つまり、イギリスではそうではない、の意)と言うのは、それはどのはずれではない。ただし、伝承版と非伝承版の相違は、起源ではなく過程にあるとしても明確ではなく、

非伝承版がさらに伝承されることもあるのでその関係は複雑である。そこで、伝承版と非伝承版はお互に影響を受けていることと、この二種は程度の差であることが多いことを考慮に入れておこう。

ヘアリング・グールドのマニユスクリプトに記録されたものは⁽³⁴⁾、一八四〇年頃にサミュエル・フォーン(Samuel Fone)が母親に歌つてもらつたとのことである。出だしの

There was a frog lived in a well,
Crook a my daisy, Kitty alone,

And a merry mouse that lived in a mill,

Kitty alone and I,

O crook a my daisy, Kitty alone

Kitty alone and I.

だけを見ると、ハリウェル版に似ているが、物語と表現はむしろリストン版と共通しており、類似はバーデンだけである。また、カークパトリック・シャープの『バラッド・ブック』(Kirkpatrick Sharpe, *The Ballad Book*, 1824)からロバート・チェインバーズ『スコットランドの民間伝承ライム集』に再録された版⁽³⁵⁾は、同じように

There lived a Puddy in a well,

Cuddy alone, cuddy alone;

There lived a Puddy in a well,

Cuddy alone and I.

There was a Puddy in a well,

And a mouse in a mill;

Kickmalearie, cowden down,

Cuddy alone and I.

と始まり、バーデンはハリウエル版の系統であることは明らかであるが、内容はもっと違っており、最後にハツカネズミは壁の穴に逃れる。いずれも語句の相違にとどまらず、異なった連を含んでいるが、全体としては短くなる。

セシル・シャープが一九〇四〜六年にサマセット州で採録した版は四種⁽³⁶⁾ある。いずれも "Heigh ho says Row-ley," なしはそれに類するバーデンを含み、また特にはじめの三版 (A〜C) は曲もリントン版に似ている。実際にA版はほぼリントン版の簡約と言ってもよいくらいのものである。このことから推定すると、これらはリントン版が伝承化したものであろう。ただし、D版は

2. Lord Frog had a mind on a sudden to ride.

He saddled and bridled a fine black snail.

He rode betwixt the horns and the tail.

と、うハリウエル版に似た内容 (カタツムリに乗って行くこと) を含み、曲節も表現も他と相違が大きい。

一九五六年にビーター・ケネディがチャネル諸島で採録した版⁽³⁷⁾は、

1. There was a frog lived in a well

With-a-ring-dum-bull-a-dum-a-coy-me

A merry mouse lived in a mill

With-a-ring-dum-bum-bull-a-dum-a-coy-me

Coy-me-nero-kill-to-care-o

Coy-me-nero-coy-me

Plim-slin-slemmer-diddle, liddle-bull-a-ring-ting

A-ling-dum-bull-a-me-a-coy-me

と非常にバーデンが発達しているだけでなく、内容も長く (十八連) まとまりがある。蛙が井戸に住んでいた。カタツムリを捕えてつのと尾の間にまたがり、水車小屋のハツカネズミの家へ出かけた。ネズミは糸を紡いでいたところで、ネズミを膝の上に乗せて求婚をしたが、伯

父さんネズミの承諾がないと結婚できない、と言う。そこへ、伯父さんはビヨンビヨンと石伝いに帰ってくる。

姪御さんと結婚したいと言うと、借地料を払えばよろしいと答える。蛙はそこで花嫁の衣装を買いに町まで出かける。隣近所みんなに招待状を出す。はじめに白い蛾が来てテープルクロスを広げ、次にマルハナバチがノミと踊る。それから、大きな雄猫が小さくて太った子猫をつれてきて、最後に大きな蛇が来てウエディングケーキをたいらげてしまう。みんなが食卓についている間に猫は伯父さんネズミをたいらげて、子猫たちは花嫁をつかまえる。蛙は家に帰ることにして、丘を下って水車小屋へ行こうと小川を渡る。そこへ白いアヒルがやってきてガーガーと鳴きながら蛙を飲み込んでしまった。ネズミの家であるはずの水車小屋が終りのほうでは蛙の家になっているのは

17. This little frog went down the hill

And swam across the brook to the will

と脚韻にもよるのだが、その他では結婚式に招かれた動物たちがいろいろと登場する点に大きな特徴がある。この特徴は一八五〇年に報告されたアイルランド版³⁸にはじ

めて記録されているものであり、アメリカ版ではきわめて一般的である。

四 アメリカ版

採録された資料からみると「蛙の求婚」はイギリスよりも北アメリカにおいて広く伝承されてきた。学術的な民謡集だけでなく一般向けの民謡集や子供向けの歌集をみると、収録していないもののほうが少ないくらいである。特に注目されるのが、アメリカ版は歌として受け継がれていることであろう。このこともあって、伝承版の多くは一般の歌集と相違が少なく非伝承版を区別しにくい。またイギリスにおけるリストン版・ハリウエル版のような特に影響力の強い「決定版」が見当たらない。未だに内容が流動的であるということは、この「歌」が伝承されていることに由来するのである。もちろん現代の伝承は純粹の口頭伝承ではなく、その間には印刷物のみならずレコード³⁹なども介在しているはずである。

イギリス版では共通していない要素がアメリカ版に認められるとするならば、それをアメリカ版の特徴とすることができよう。セシル・シャープがアラチアで採録

したものは『南アバラチアで採録したイングランド民謡集』⁽⁴⁰⁾に十一種類が掲載されているが、「イングランド民謡」という題名にかかわらず、それらはすべてアメリカ的な版である。その特徴は、まずパーデンがきわめて短くなっており、*ˌaːhə, ˈhɪm, hɪm* などが多い。蛙が求婚に出かける時に持っていくものは刀とピストル⁽⁴¹⁾ (sword and pistol) である。結婚式には多くの動物が登場する。この他にも、ネズミを膝に乗せて求婚すること、木のむくろで式をあげること、黒い蛇に飲み込まれてしまうことなど、すべての版ではないが、アメリカ的な要素を含んでいる。これらの要素はいずれもアメリカのみで見られるものではないが、イギリスではあまり一般的でないものである。ことに、旋律についてはパーデンと相まってアメリカの他の地域のものとも共通している版が多い。

しかし、アメリカ版はもう一方では様々な異版を生じている。L・W・ペインは四一種のテキサス版を集めているが、そのうちEタイプと呼んでいる *ˌhɪn-hɪn* などのパーデンを含む二十七種でさえも「いかなる二つの版も、たとえ同一家族の中で歌われていても、まったく

同じということはないだろう」と言っている⁽⁴²⁾。先ほど述べたアメリカ的要素というのは、ほぼこのEタイプに多く見られるのであり、その他のタイプでは相違はもっと大きくなる。

このような統一性の欠如は一般向けの歌集にも見られる。たとえば『シム・アロンツ・ジョーギー』⁽⁴³⁾とていう子供向けの歌集では、

24. The frog and the mouse they went to France,
h'm, h'm.

And this is the end of my romance, h'm, h'm.

25. Frog's bridle and saddle are laid on the shelf,
h'm, h'm.

If you want any more, you must sing it
yourself, h'm, h'm.

とフランスに行つて話が終る。これはおそろく

The snake he swum across to land, um-huh,

The snake he swum across to land,

And there got killed by a big nigger man, um-huh.

The big nigger man he went to France, um-huh,
The big nigger man he went to France,

And this is the last of all nonsense, um-huh.

という話⁽⁴⁴⁾が短絡した版であって、編者が勝手に作り上げたものではなく、伝承版から引き継がれているのである⁽⁴⁵⁾。ただし、リチャード・ダイア・ベネットが歌⁽⁴⁶⁾版は、二匹が結婚して子供が三匹生まれ、そのうち一匹はゲロゲロと、他の二匹はチュウチュウと鳴いて、三匹とも長い尾と水かきのある足をしていたという話で、ダイア・ベネット自身の作である。

さらに変化が進んで、物語性が薄められ、しばしば結婚式の部分が欠落し、バーデンはこの反対に発達したものがあ⁽⁴⁷⁾る。「井戸の蛙」(The Frog in the Well)、「泉の蛙」(The Frog in the Spring)、「井戸に蛙がおりました」(There was an Old Frog)などの題名でも知られており、旋律も異なったものであり、同じ地域でも別の歌として扱われていることがある。特に黒人の間で伝えられたものは「Kitty Kemo,」「Kemo Kimo,」「Polly Kimo,」などと呼ばれ、

Dar (=There) was a frog lived in a spring,

He had such a cold dat(=that) he could not
sing,

I pulled him out an' frowed (=threw) him on
de groun',

Oh frog he bounced an' run aroun'.

Camo, kimo, daro, war,

My high, my ho, my runstipunstdiddle,

Soot bag, pidly-wickern, lich'em, nip cat,

Sing song, Polly, won't you kime, oh?

のように、ほとんど物語歌ではなくなってきたものがある⁽⁴⁸⁾。

五 バラッドとの関係

「蛙の求婚」はたしかにナースリー・ライムと言えるのであるが、物語性からも伝承の様式からもバラッドと基本的な相違は認められないようだ。もちろん英米における伝承の違いはあるのだが、そのことはバラッドでも同様のことが言える。それならば、なぜ長い間バラッド(少なくとも典型的なバラッド)とされなかったのであ

ろうか。

すぐに考えられることは、子供の歌であったということである。ただし、この歌は子供が作ったのでもなく子供だけで伝承した歌でもない。L・W・ペインの調査をみると、報告者は男性もかなりいるが、その報告者に伝承した人は子供ではない。過半数が母親(または祖母)である。親・祖父母・親戚のいずれかが大多数で、他人から教わった場合は一例しかないのである。つまり、母から子へ、そしてそのうち娘だけがさらにその子供へ歌い聞かせてきた。このような意味において、伝承者は大人であり子供は被伝承者である。つまり、子守り歌のように大人から子供に伝えられる歌であり、ナースリー・ライムの仲間に入りうるのである。しかし、多くの遊び歌とはちがい、子供から子供へ伝わるのではない。バラッドの形式をととのえているのは伝承者が大人であったからで、この「蛙の求婚」は決して「わらべ唄」には含まれないものであった。ただし、子供たちは韻文の物語を作ることができることは強調しておかなくてはなるまい。

次に伝承性の問題がある。いわゆる「伝承バラッド」

がブロードサイド系バラッドを排除してきたという研究上の伝統からすると、「蛙の求婚」には印刷物が関与している場合が多いので同様の扱いを受けやすい。しかし伝承は起源によって決まるものではない。ことにアメリカ版のようにいまだに伝承の流れの中にあるものは、注目しておくべきであろう。

「蛙の結婚」は物語の内容そのものによっても区別されてきたのかもしれない。第一に動物が主人公であるということ、それだけ現実味を失なわせ、諷刺的になり滑稽になりやすい。バラッドは民話(folk tale)とはちがって現実味のある話が中心であるので、ほとんどの場合は人間が主人公であるし、はじめからフィクションであるという語り口はあまり発達していない。題材からすると民話の場合の動物物語(animal tale)に近いものであろう。それだからこそ、ナースリー・ライムの仲間入りをしたものと思われる。同じく動物を扱うものであっても「三羽のカラス」は現実の世界との結びつきが強くて、寓話性がないのでバラッドとして受け入れられただけではなからうか。

以上のごとく、バラッドは単に物語民謡であるだけで

なく、もっと狭い概念として用いられてきた。しかも、ハラルドを広く口承文芸の一部として考えてみるためには、口承のナーズリー・ライムとの関係もあつた検討が加えられなくてはならぬ⁽²³⁾。

(103) 『蛙の求婚』をめぐって

- (1) Iona and Peter Opie, *The Oxford Nursery Rhyme Book* (Oxford, 1955).
- (2) MacEdward Leach 註 “The Fox” の訳注 (『The Book of Ballads, Heritage Press, 1967, p. 209』)
- (3) 題名そのままで “The Frog’s Courting,” “The Frog and the Mouse,” “The Marriage of the Frog and the Mouse,” “Mr. Frog Went a-Courting” などがある。
- (4) Evelyn Kendrick Wells, *The Ballad Tree* (Ronald, 1950), p. 159.
- (5) Iona and Peter Opie, eds., *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes* (Oxford, 1951; 1969) など参照のこと。以下 ODNR 参照。
- (6) Ed. J. A. Murray, EETS (1872), p. 64.
- (7) キュー未熟は「蛙の子を産むさいふ」の語彙 (ODNR, p. 21)。
- (8) この蛙の「フタムシ」は口承文芸の語彙。
- (9) The English Experience No. 411 (Da Capo Press, 1971) の複製版を参照のこと。
- (10) Francis James Child, ed., *The English and Scottish*

Popular Ballads (1882—98; rpt. Dover, 1965), Vol. I, pp. 253—4.

- (11) E. K. Wells, op. cit., pp. 159—60.
- (12) ODNR, p. 180.
- (13) Robert Chambers, *Popular Rhymes of Scotland* (1826; New edition, W. & R. Chambers, 1870), pp. 56—7.
- (14) ODNR, p. 180.
- (15) Ibid., p. 179.
- (16) Iona and Peter Opie, *Three Centuries of Nursery Rhymes and Poetry for Children* (Oxford, 1977), p. 73.
- (17) ODNR, p. 179.
- (18) Edward Lee, *Music of the People: A Study of Popular Music in Great Britain* (Barrie & Jenkins, 1970), p. 63; Reginald Nettel, *Seven Centuries of Popular Song: A Social History of Urban Duties* (Phoenix House, 1956), p. 212.
- (19) ユニオン歌の「マク・マク・マク」の語彙 J. S. Bratton, *The Victorian Popular Ballad* (MacMillan, 1975) の巻末に中巻を参照。
- (20) L. W. Payne, Jr., “Some Texas Versions of ‘The Frog’s Courting’” in *Rainbow in the Morning*, ed. by J. Frank Dobie (1926; rpt. Folklore Associates, 1965), pp. 14—5.
- (21) W. Roy Mackenzie, *Ballads and Sea Songs from Nova*

- (21) *Scotia* (1928; rpt. Folklore Associates, 1963), pp. 373—4
 註' 各々の歌集をその版に於て。その中に口頭伝承の
 歌謡を採りてその中にその歌を採る。
- (22) トキマス氏 *ODNR* 以下。
- (23) トキマス氏 Raymond Briggs, *The Mother Goose Treas-
 ury* (1966; Puffin Books, 1973), pp. 112—3; *Marguerite
 de Angeli's Book of Nursery and Mother Goose Rhymes*
 (Doubleday, 1953), p. 126.
- (24) *ODNR*, p. 179.
- (25) Opie, *Three Centuries*, p. 5; William S. Baring-
 Gould and Cecil Baring-Gould, *The Annotated Mother
 Goose* (Bramhall House, 1962), pp. 75—7.
- (26) "Publisher's Note" to *The Nursery Rhymes of Eng-
 land* (1842; Bodley Head, 1970), p. iv.
- (27) トキマス氏 北原白秋の『こけい』に於て見られる『#
 知事・くわん』角川文庫『昭和五十一年 一七四—一七五』
- (28) 『ボートン民謡集』版を改訂した書に於
 ける。
- (29) トキマス氏 本題に於ける Donald Mitchell, *The
 Faber Book of Nursery Songs* (Faber, 1968), pp. 140—1;
 Leslie Woodgate, *The Puffin Song Book* (Penguin Books,
 1956), pp. 104—5 以下に於ける。
- (30) *The Original Mother Goose's Melody* (1889; Singing
 Tree Press, 1969) を参照。
- (31) *Three Centuries*, pp. 28—9.
- (32) 押上' トキマス氏の『Yankee Doodle's Literary
 Sampler of Prose, Poetry, & Pictures, Thomas Y. Crowell,
 1974, p. 161』。
- (33) James Reeves, *The Everlasting Circle* (Heinemann,
 1960), p. 116.
- (34) *Ibid.*
- (35) Chambers, op. cit., pp. 55—6.
- (36) Maud Karpeles, ed., *Cecil Sharp's Collection of Eng-
 lish Folk Songs* (Oxford, 1974), Vol. II, pp. 385—9.
- (37) Peter Kennedy, ed., *Folksongs of Britain and Ire-
 land* (Cassell, 1975), p. 649. 1) 本題に於ける
 以下に於ける *The Folksongs of Britain*, Vol. 10 (Animal
 Songs)(Caednon Cassette CDL 51225) に於ける以下に於ける
 番号 (Δ η — 2 氏 Caednon TC 1225/Topic 12 T 198)。
- (38) L. W. Payne, Jr., op. cit., pp. 9—10.
- (39) トキマス氏' Doc Watson: *Home Again!* (Vanguard
 VSD-79239); *American Folk Songs for Children* (Round-
 er 8001—3); *A Child's Introduction to American Folk
 Songs* (Spoken Arts SA 223); John Jacob Niles *Sings
 Folk Songs* (Folkways FA 2373); *Mountain Songs and
 Stories for Children* (Spoken Arts SAC 6150); *Anglo-
 American Songs and Ballads* (Library of Congress AFS
 L 12) 以下に於ける (巻終の各頁を参照)。

- (43) *English Folk Songs from the Southern Appalachians* (Oxford, 1932; 1952), Vol. II, pp. 312—9.
- (44) *ワシントン・マックスの絵本* (ワシントン・マックスの歌集) の終り (1952)。
- (45) L. W. Payne, Jr., op. cit., p. 35.
- (46) Nancy and John Langstaff, *Jim Along, Josie: A Collection of Folk Songs and Singing Games for Young Children* (Harcourt Brace Jovanovich, 1970), pp. 64—6.
- (47) Vance Randolph, ed., *Ozark Folk Songs* (The State Historical Society of Missouri, 1946), Vol. I, p. 407. *ふし用* (ワシントン・マックスの歌集) の終り (1952)。
- (48) Eloise Hubbard Linscott, *Folk Songs of Old New England* (Macmillan, 1939), p. 202.
- (49) *The Richard Dyer-Bennet Folk Song Book* (Simon and Schuster, 1971), pp. 74—6.
- (50) ショーン・ヤランド・ソンの民謡集『ナイルスのソング・ブック』別扱 (1952)。
- (51) 引用は Howard W. Odum and Guy B. Johnson, *Negro Workaday Songs* (1926; Negro Universities Press, 1969), p. 187. *ワシントン・マックス Ira W. Ford, Traditional Music of America* (1940; Da Capo, 1968), pp. 418—9, 450—51 参照。
- (52) L. W. Payne, Jr., op. cit., pp. 16—48.
- (53) Brian Sutton-Smith, *The Folkstories of Children* (Univ. of Pennsylvania Pr., 1981).
- (54) 民謡の分類 (ワシントン・マックス『Anti Aarne and Stith Thompson, *The Types of the Folktale* (FF Communications No. 184, 1964); Ernest W. Baughman, *Type and Motif-Index of the Folktales of England and North America* (Mouton, 1966) を参照。また『蛙の求婚』の語彙 (1952) を参照 (ワシントン・マックス『蛙の求婚』の語彙, op. cit., pp. 158—75; Willa Muir, *Living with Ballads* (Hogarth Pr., 1965), pp. 13—34 を参照)。
- (補注) 木島始『イギリスのわらべうた』(お・そ・ら書房、昭和四十四年) 二六一—二七頁に「かえりのふしめがし」があるが、歌詞を曲も典型的なアメリカ版である。この絵 (金十(2)江) は英米の折衷とソング印象を受けず。(1 橋大学助教授)